

昭和二十六年七月十三日發行

三種郵便物認可
(毎月一回・十五日發行)

(通第一四八号)

慈

光

第十三卷

第七号

目次

教行信証『信卷』(三)	近角常観(1)
心と真実	佐藤強三郎(6)
天親菩薩の御自督	花田正夫(13)
師の言十年	川畑愛義(17)

教行信証『信卷』

(三)

近角常觀

『真心を開闢かいせんすることは大聖こうせいの善巧より顕彰けんしょうせり。』

大聖とは釈尊、釈尊の仰せ、その仰せが阿彌陀仏と一致して私共を救わんとするの遺る瀬なき御慈悲である。このことは『信卷』の終りの方に説かれた、阿闍世王入信の処に

「茲を以て今大聖の真説によるに、難化の三機、難治の三病は、大悲の弘誓をたのみ、利他の信海に帰すれば、斯を矜哀して治し、斯を憐愍して療し給う。たとえば醍醐の妙薬は一切の病を療するが如し」

との文があります。これが大聖の矜哀であります。善巧とは阿闍世王が信仰に入る経路であります。このことは『懺悔録』にくわしく述べました。

『我れ阿闍世王のために涅槃に入らず』

との御言葉は、一番悪い息子の帰つてくるのを親が待つて居て下さるのである。阿闍世王とは煩惱具足のもの、未來の五逆の我等がため止まりて我涅槃に入らず、常住して救うぞ、必ず手引すると仰せ下さるのである。

この仏の御心に心ひらけた阿闍世王が、仏徳を讃嘆した偈頌うたの最初に

実語じつご甚だ微妙にして、句義に善巧たり。

甚深秘密の蔵、衆の爲の故に顯示す。

とあり、ここに初めて善巧といふ文字があります。曇鸞大師も善巧という事は云われたけれども、然し殊に御本書によくそれが現れてある。

大聖釈尊が、阿闍世王、即ち末代の悪人を棄て給わぬ如來の御手引ということはいわれたのである。私は御慈悲に入つた当時は書物に依ることなく、二三年の間、只所信の爲に活動して、西洋で初めて適切に大經を拝読し、帰つてから御本書を頂いて読んで見れば、全く自分の事を書いてあるのである。阿闍世王のことは自分にそのままである。この阿闍世王が、かゝる遣る瀬なき大悲により救われたのは、全く大聖の善巧である。

次に気づいたのは

「誠に知りぬ、悲しい哉、愚癡じゆしやうのかす、愛慾の広海に沈没し、名利の大山に迷惑し、定聚じやうしゆ之教に入ることを喜ばず、

真証之証に近くことをたのしまず、恥ずべし、傷むべし」

御開山聖人はてつきり阿闍世のことを自分だと御思召しになつてに違ひない。御本書の始めにも阿闍世のことが出ておる。阿闍世とは御開山聖人自身の御自覚である。私の考うるに、現に阿闍世王とは私自身のことである。身は病みてありしが仏の月愛三昧によりて先ず癒され、それより心に及ぼし給える阿闍世王と同じく、私も病を癒されて後心を安らかにして載いた。

大聖のおの／＼もろとも凡愚底下のつみびとを逆惡もらさぬ誓願に、方便引入せしめけり。

こう云う我を御見捨てなく、如來はお迎え給うのであります。逆惡もらさぬ如來の誓願に方便引入して、何をお知らせになるか、全く御慈悲一つをお知らせ下さるのであります。私は明らかに感じました、理屈ではありません。私はこの書物を拝読した時に、私の入信当時の事だと思ひました。その後私の一身上に或問題があつて具体的にひしひしとこの御導きを感じたのであります。私に知らすためにかくまでもいろいろ／＼にして下されたかと、善巧方便を人生の事実の上に感じたのであります。

釈迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、我等が無上の信心を、發起せしめ給ひけり。

釈尊の阿闍世王に於ける、皆大聖の善巧の御手引であります。

然しここに事を分けて言わぬと誤りに陥つて信仰上の人生觀を根本から壊す様になる。私は阿闍世王の様な悪いことをして来たとは思つたが、その自分の悪いのが仏の手引だとは思わぬ。阿闍世王の信仰に入ると同じ様に周囲に種々の手引が起りて信仰に入らせて貰うた。然しながら私に悪い心の起るのも御手引であるなどの念は一分一厘も起らなかつたのである。實際自分是一分も善い事はない。その善くないものを助けて下さる仏であるとの自覚が生じたら、阿闍世の逆惡も仏がさせたのである等との思いが決して出るものでない。

近頃世間に、仏の光明の手引、善巧方便などと云うことがしきりに云われる様になつた。

私が思うに、善巧方便など云うことは、そも／＼私が言ひ出したのである。然し乍ら今日世間で言う如き一般世間の意味で云うたのではない。私は其時は或事柄につき、極く具体的に仏の御手引をあり／＼と感じたので、世間のことは皆何事も仏の御手引である一般的なと思うたのではない。私が悪いために、仏が永々右に左に御苦勞下されたのであると感じたのである。即ち云い換えれば、私が悪い

めに仏が現れて下されたのである。其時私は仏天の御計らいと云う言葉を使いました。こんなことは今までの人の言わぬ言葉である。私は其時、この御言葉を『御消息集』で読んで、親鸞聖人の御実子善鸞上人が、聖人の信仰のあとを乱された。その時に聖人が『仏天の御計らいに任せ奉るべし』と仰せられた御言葉が実に有難いと思い、此文字を用いたのである。これは浮いて言える言葉ではない。よほど深きありがたい思召しの上から出て来た言葉である。世間一般の事について迂闊に云える言葉ではないのであります。かく言えはとて人生上に、仏の御手引はたしかにある否あらねばならぬと私はたしかに信ずる。あればこそ人が信仰に入ることが出来るのであります。

大聖おの／＼もろともに凡愚底下のつみびとを、逆惡もらさぬ誓願に、方便引入せしめけり。

色々の出来事は皆この大悲を知らすための手引であるのです。手引には意味があります。処が近頃信仰をそつちのけにして手引ということを大層言う様になり、濫りに善巧方便という事を云います。されば或一面では仏の御手引ということを人生上でいうてはいかぬ等という様になりました、これもまたいけません。

手引によつて何を知らせて下さるのかというと、逆惡もらさぬ誓願をしらせて下さるのである。私は本当に思いま

くの如き御慈悲のわからぬも仏天の御はからいなどと浮いたことではないのであります。

「悲哉、愚禿鸞、愛慾の広海に沈没し、名利の大山に迷惑し、定業の数に入ることを喜ばず、真証の証に近く事を樂します、恥ずべし、傷むべし」

と、自分こそ阿闍世王である。実に恥ずべき痛むべき身であると懺悔され、かくの如き者を見捨てず助けて下さるお慈悲と喜ばれたのであります。

で、私は大聖鈴哀の善巧をよく申しましたが、今日の人の言うのは私の言うことを充分了解せずして、一般的の論にして下さるという事がわからぬ。是私が人のことを言うのではない。この事については思想上に散乱をきたすことがある故云うのであります。

又この阿闍世王のことは、入信當時の事に書いてあるのは勿論なれど、此頃始めて気が附いたのは『歎異鈔』の第九章に

「しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりとしられて、いよ／＼たのもしくおほゆるなり」

この煩惱具足の凡夫は、入信の時は飛び上る様に喜んで

す。親鸞聖人の一代の間、真宗を開かれたのは何かというに、明了に言えば破戒の者を助けるのは、仏の本願、実に破戒の親鸞であると云われたのである。

今日の人は聖人は自ら破戒の容を示された。と云うけれども、示そうとて示されるものでない。自分はどちらでもよいが末世の衆生のために破戒の姿を示そうとしてはかゝる信念はおこるものではない。

『御伝鈔』でも、六角堂へ聖人が参観された時、救世菩薩の告命をうけて、家庭の宗教を開かれた。これは仏の告命である。これを人が前後左右出来ぬ

「是はこれわが誓願なり。善信この誓願の旨趣を宣説して、一切群生に説き聞かしむべし云々」

在家のまゝで仏の御慈悲を知らせよとの如来の御手引を感じ、そのために流罪に処せられても、安んじてこれを受けることが出来たのである。これが親鸞聖人が真宗を御開きになつた大聖鈴哀の善巧方便であります。

又御子に善鸞上人がありました。その方は仏の御誓願の真意が解らぬために、聖人は御子を勘当されました。如何にしても御本願の遣る瀬なき思召を人に知らせねばおかぬとの御心で、御子でさえも勘当されました。決して仏天の御計らい等と打捨て、投げやりにはされません。即ち、か

もまたいろ／＼煩惱の雲に覆われてしまうこと、誠に浅間しいことなれど、斯くの如き煩惱具足の凡夫の我等なればこそと、聖人も自ら煩惱具足の凡夫と、八十歳の時も、五十二歳の『教行信証』にも、悲哉、愚禿鸞云々、と、いつも煩惱熾盛の凡夫なればこそと喜ばれました。

「しかるに煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろずのこと、みなもてそらごと、たわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします云々」

此世はそらごとたわごとまことあることなきに、念仏ばかりはまことであるといわれてある。

阿闍世王のみではない、末世の我等みな同様浅間しきものである。されば「阿闍世とは煩惱等を具足せるもの也」と仰せられてあります。阿闍世王とは人の事でない、今現にかくの如く煩惱具足せる我等一人々々が阿闍世で、共に仏の御救いにあずかるべき身であります。

他力の悲願は斯くの如きの我等がためなりけり云々。死なんずるやらんと心細く覚ゆることも煩惱の所為なり云々。

これまた阿闍世王が入信の時

如来は一切の為に常に慈父母となり給えり

世尊の大慈悲は衆のために苦行を修し給うこと

人の鬼魅に著せられて、狂亂の所為多きが如し。

とある。我等が煩惱の為に狂乱し、居るのを見たまい、仏またじつとして居られずに種々に恰も人が鬼魅に着せられて狂乱するが如く、種々に善巧方便して導いて下さる。是皆善巧方便の御手引であります。

然るに末代の道俗、近世の宗師、自性唯心に沈んで、浄土の真証を知らず、定散の二心に迷うて、金剛の信心に暗し。

自性唯心とは、哲学とか、又は多少信仰に心がけてる人でも理屈的になつて居る人は、真に人格的の仏の恵に貫徹することが六ヶ敷い。仏の恵み極楽のことが有難くなれぬ。迷が去るのは仏の遣る瀧ない思召からである。仏の土は光明土である。仏は尽十方無碍光如来である。自力ならば此土で悟るのである。が、娑婆に対して仏の浄土があるという浄土の真証は他力によつて明らかになるのである。自力だと唯心になるのである。

理屈では疑う人は無けれども、実験上、人格的の強い真の救済は味わえず、広い意にすると、浄土の真証が解らないが信仰の一念に明らかになるのである。

定とは冥想、散とは実行、これ等を主にすると真の大悲が解らない。真の大悲に氣附いて見れば

「爰に愚禿釈尊、諸仏如来の真説に信順して云々」
実に森嚴なる御言葉ではないか。一面謙遜のようなれど、

心 と 真 実

第三編

第五 青年問答

翌日信哉は出て夕食後帰つた。

伴は一人で信哉の室を訪ねた。区長はそれを見て、わざと遠慮して行かなかつた。信哉と伴は「青年の生き方」とか「国家」とかいうことについて色々語り合つた。

信哉「青年は理想を追うて、堂々と生きましよう。いく度失敗しても立上り、くじけず、あきらめず、誠実をつくして進みましよう」

区長の伴「どうすれば世の中は住み良くなるでしようか」
信哉「それは大変大きな問題です。自分の心の問題です。

国家には御承知の如く、憲法を始めとし色々の法律や制度がある。これは勿論大いに必要なのです。然し結局、個人々々が立派でなくては立派な社会、国家は実現しないでしよう。

現在の日本に於ては国会が頭脳であらう。民主主義の国家を運営するのは、国会議員ですから、その議員を選挙することは、実に重要な国民の権利、義務です。この

一面非常に自信力のある言葉である。

諸仏如来の真説に信順するというのは如何にも広大なる自信にまします。聖人、一代勧め給う信心は、釈尊真説の經文により、天親菩薩の浄土論によりて三經の本意、信心を主とし、一論の正意、唯一心が肝要であるとの仰せである。信卷に懇々と三問答をなされて、論主の思召、弥陀の願意を明らかにせられたが、信卷の御精神であります。実に聖人一代の御教化はこの真実信の一つであります。

涅槃經 十六卷 嘆仏偈頌

大いに衆生を慈愍して 故に今我帰依す
善く衆の毒箭を抜く 故に大医王と稱す
世医の療治する所 差ゆと雖も還て復生す
如来の治したまう所は 畢竟して復發せず
世尊甘露藥を以て 諸の衆生に施したまふ
衆生既に服しおわりて 死せず、亦生ぜず
如来今我が為に 大涅槃を演説したまう
衆生秘藏を聞て 即ち不生滅を得む。

佐藤 強三郎

選出如何によつて国会の良否が定まるのです。

その重大なる選挙が立派に行われてゐるか。その選挙が立派に行われなければ、いつになつても立派な議員が出るわけがない。悪い頭脳で良い考えが出るわけがない。

この弊害を是正しようと、法律制度を改正するのですがいつも警察官よりは、泥棒が先廻りするように、後手になる。泥棒は何時も警察などの隙を見てやるが、警察官は表面に出ないものを捕えるわけに行かぬ。

そこで法律をつくるのも必要だが、警察官が見ていなくとも悪いことをしない人間を育てることがもつと必要である。

民主政治は多数決政治です。

議會に於ては、議事は結局多数で定める。裁判に於てもその判決は、最後には判事の多数決で定める。

衆、参兩院の選挙は、すべての選挙の中で最も大事な代表的なものであるが、その選挙権は、男女、貧富、賢愚について、平等で変わりがない。権利は平等であるが、人間個人の能力には大いに差別がある。その差別のある

個人が、平等の効力のある投票をするのです。

貧しい者の一票も、金持の一票も、智者の一票も、愚者の一票も、同じ価値の一票である。ここに一般投票の大きな欠点があるのです。これからの民主国家には、この多数決の弊害があらわれて来るのでしよう。然し、たとえ、民主主義の政治方式である多数決制度に多くの欠点があるにしても、昔の専制主義の欠陥よりはどんなにいいか。これは確かに時代に相応していると思う。然し、制度を生かすものは人間である。先ず一人々々が立派な人間となる事です。

資本主義、共産主義、等、どんな主義をとつて見ても、国民個人が立派でなくては立派なる国家は出来ないだらう。

一方、真理とか真実とか言うことは多数決では定められる問題ではない。

この様なことが人生にはあるのです。いかに多数決で一時は勝つたように見えても、それは本当に勝つことは出来ないのです。

ある堅固なる信念を持つて、なお世とみだりに争わず、自分も生き、世をも向上せしめる方式もありましよう。即ち精神的に満足して生きる事である。

国家を担う青年に尊い理想がなければ国の発展を期する

きられず、どこまでも真実を望んで生きて行くことが出来ると思う。学問よりも名譽よりも、物よりも、金よりも、なお尊いものがある。是に生きましよう。五分五分を離れたる絶対の慈愛と真実を聞いて、これに拠りて生きましよう。

信仰の立場より二つの面がある。

どこまでも頭を下げて平和に行く事も出来るし、又他面自己の所信を主張して死しても屈せざる事も出来る。

……」と話をすすめた。

区長の伴「近頃学校で綴方を作らせ、自由教育だとか、ありのままに書くのだとか教えるものですから困ることがあります。父兄にも困ると云つてゐる者もある。

それはいくら正直に、あからさまに書け、と云つても、自分の家は、姉さんも兄さんも肺病で困つてゐるとか。お母さんとお祖母さんが毎日喧嘩ばかりしてゐるとか。父が選挙違反で連れて行かれたとか書くとは、あまり露骨すぎますよ。

それに、それを先生だけが見て、その子供に、黙つて返してくればまだよいのですが、先生によつては、その中のひどいのを、上手に出来た、と云つて教室で皆に読んで聞かせるという話だ。本当に行き過ぎだと思ひますどうでしょうか？

ことが出来ないのみならず、家庭にも光明がない。

理想とは何であらうか、共に幸福に暮して益々向上発展する事であらう。ところが、世には理想を追う青年程苦しみ悩む者が多い。それは人生の矛盾にぶつかるからである。この時に理想を捨てるか、真実に立つか。言わずとも青年は真実を求め、理想に生きんと念願するのであらう。世の荒海に漕ぎ出て見れば、風も吹く波も立つ。それが真面目な立場から起るものであるならば、それは忍耐すべきであり、これによつて鍛錬することが当然である。そしてそこには愉快があり、希望がある。

然し、こうばかりではない。経営者の私利私欲から、又上役の横暴等から苦しめらるることもあるであらう。その上、尚不正を強いられる事すらも出て来るかも知れぬ。こんな場合どうするか。

先ず生きんがために何事も忍ばなければならぬであらう先ず忍びましよう。そして考えましよう。然し理想は捨てないのです。鍛錬を受けましよう。青年が事業に失敗する時、一時の誘惑にひかれて罪をおかすとき、又失恋する時、前途を悲観して自暴自棄になり、遂には自殺する者もある。然し、いかなる事があつても、自殺はすべきでないと思う。

真の宗教によりて、問題を解決し、青年はくじけず、あ

聞けば、或国では親の罪を子が政府へ密告することを奨励するとか、云いますが、……」

それを聞いて信哉の眼は輝いて来た。

信哉「事實は私もよく知りません。

私共は生きたい、平和で長く生きたい。只、自分だけが生きたいために、人を倒し、人を殺し、人をあざむき、力だけをもつて相争うものならば、何等禽獣と異なるところがない。それでお互に愉快であらうか。何人も楽しく生きたいと願うものであらう。

私と最も近いものは親である。次が兄弟である。世界の人も平和で楽しく暮したいのですが、手近から始めるのが順当でしよう。即、家庭から始まると思う。

愛するとは相手の幸福をはかることである。相手の幸福をはかるためには、自分の苦しみをも耐えて尽すことである。

愛の極致は相手の幸福のために、自己を顧みないことである。正しい幸福のために、お互にこの気持がなかつたら、平和はないでしよう。

生きて行くためには、衣・食・住が絶対必要です。従つて金が必要です。然し金があれば何事も解決出来るが。金があつても、女は男になることが出来ない。思う様に美人にもなれない。賢明な頭脳を買うことも出来ない。

死ぬ生命を買うことも出来ない。

心の幸福を金で買うことは出来ないのだ。

○金そのものに幸福があるのでなく、

思い遣りの心をもつてその金を使用するから、幸福が、もたらされるのであると思う。金が先きでなく、思い遣りの心が先きなのです。

真の幸福は思いやりの心によつて得られるのです。人の事を思い遣りましょう。兄弟のことを思い遣りましょう。親の事を思い遣りましょう。それが……平和の目標です。中国の言葉（論語、子路篇）に、
『孔子曰く。父は子の為に隠し、子は父の為に隠す。直きこと、其の中に在り』

とあります。これは親と子の様な近い親しい仲では、悪い事は、ありのまま正直に言わず、親と子と、互にかばい合つて、その悪を隠すのがよいというのでしょうか。これは、子を愛するがために、自分が如何なる困難、不利を忍んでも子供のためにその罪をかくし、何とかしてその罪を償つてやろう、反省させようと、忿ずるからです。思い遣りを持つて子供のためをはかるのです。

新聞で見たのですが、或ところに、悪い子があつて、親に死ぬ程の怪我を負わせた。警察が調べたが、親は子が下手人だとは決して言わぬのです。頻死の親が、子がし

るべきである。その親が責任を果さぬのであるから、責任上、親が憎い』という思想です。

他人は初めから責任がない。その責任のない人が親切にしてくれるのだから、感謝する。どれ程親が親切にしてくれても、それではまだ足らぬ。足らぬ。と、どんなにしてやつても不足に思つて恨んでいるのです。」

倅「さう云われれば、そうなりますね」

信哉「これらは、相對思想、五分五分根性から出て来るのです。これは全く無理ありません。世界中の人間はこの法則の下に住み、これにしばられているのです。

小学校から大学まで、成績の良いものは賞され、悪い者は罰せられる。社会でも国家に功勲のある者は、文化勲章などを貰い、悪い者は処罰せられます。………

………名譽、利欲、人情等、いずれの方面に於ても、この五分五分が破綻を來たした時は大騒動です。鬭争、自殺、逃避等の結果を生じます。

この五分五分の苦闘は、対外的と対内的とに分けられましょう。

対外的とは、自分と自分以外の人、社会に対して、是非善悪、五分五分を以て争うのです。自分は一人、他人は大勢です。その大勢の他人と、金銭も、人情も、良く計算が合つて、差引残高無し、とは、仲々行かないでしよ

たと決して言わなかつた、とのことです。それは子の罪を軽くしたいが一念なのです。

私共は平和を望み、幸福を願う。道徳も文学も、平和な社会を実現させるためのものでないでしょうか。

そうすれば、平和を害する家庭の醜状を、ありのまま書くなどは、少年に勸むべきでない。先生としては、むしろ禁すべきだと私は思います。

少年も、青年も、堂々と正義を踏んで勉強すべきだと思ふ。相互扶助、即ち互に思い遣り合つて行くのが平和の道であると思う。いかに自由を尊ぶからとて、家庭の悪を世の中へ自由に告白するなどは、最も慎しむべきことであると思う」

倅は、面白そうに聞いていたが、「また來ます」と云つて遅く帰つた。

第六 大小の三角形

その後区長の倅は信哉との話をたのしんで暇がある毎によく來た。信哉も熱心に色々の事を話した。

区長の倅「世には驚く程親を恨んでいる子供が居ますね。

親だから憎いというのです」

信哉「そうですか。それは無理もないのです。私も知つています。その人の考えは『親は自分に責任を尽してくれ

う。

対内的とは、心との争いです。ある理想を立て、善を積み悪を捨てんとする時に、昇れば昇る程、理想には手が届かぬ。他人から見ても如何に立派になつた人であつてもその人自身が心に聞うて、まだ足らぬ、と感じた場合には、やはり未熟なのです。やはり悪いのです。その人には満足がない。悲観です。その結果は恐ろしい。

毎日の新聞にいろ／＼出てますね。少年や小女が、親に叱られたり、先生に注意されたからとて家出をして社会を騒がせる。青年が上級学校へ入学出来ないとして煩悶して遂に死ぬとか。嫁、姑の紛争、親子の身投げ、株屋が失敗しての強盗傷害、太陽族の横行、等々毎日つきません。聞いたことですが、

あの有名なロシヤのトルストイ翁も八十才にもなつて家出をし、冬の寒い時に小さな駅で遂に亡くなつた。それは宗教上、芸術上の高い理想に対して苦悶された結果であるうという事です。他人から見れば、翁は当時、既に世界の最高峰に立つ人物として一世に尊敬された人である。常人から見れば、何を苦しんで、あんな行動に出て夫人を始め家人にまで迷惑をかける必要がどこにあるう孫と手を取り、家庭を、人生を楽しんで居たらよさそう

に思われるでしょう。翁が、年老いても理想を追究し止まなかつた偉大な修道者であることは世人の驚嘆するところですよ。また、翁があのように行動し、あのような臨終を遂げ、それで、本人自身満足して死なれたとしたならば、仮令死に様はどうあるとも幸福であつた。然し他人が見て、あれて十分である、と批判しても、本人が心にかえりみて、……まだ足らぬ、これではいかぬ、……と不満であつたら、どんなに苦痛であつたでしょう幸福も、満足も、自分の心の問題です。

少女も家出をした。翁も家出をした。その家出をしたことは同じです。

さて、学校で『幾何学』を勉強する。先ず三角形をかい

て角度の研究を初める。三角形の内角の和は二直角である。即ち百八十度である、一つの角が九十度であれば、他の二角の和は九十度である。

世界中の人が、三角形をかい

て、その角度を計算する時には、これは、どこでも、いつでも、必ずあてはまる公式である。どんな小さな三角形を書いても、どんな大きな三角形を書いても、また、宇宙にいつぱいの三角形を想像しても、三角形と名づけられるものであれば、三角形の内角の和は、二直角で、百八十度である。

この三角形の角の頂点。A、B、C、を智、情、意と

者は、老年になつてピストルで自殺した。その時賞金を沢山持つていた。この人は、経済学者としては、スミス、マルサス、リカードに続く偉大なる学者で、米國に亡命したり、色々波乱の多い生活をした人だそうです。他人からは、如何に見えても本人に十分な精神的満足、安定がなかつた結果でしょう。

日本にも有望な若い芸術家等が、次々と自殺して行きます。実に惜しい事だ。これらはみな本人に満足、安定がないためでしょう。

政治家にも、軍人にも、宗教家にも、その他の人にも自

し、三角形を人間と見れば、人間の一切の、喜、怒、哀樂の行動は、夫々説明出来ると思う。そして、それを小さな三角形で研究した時には、それは大きな三角形にもあてはまると思う。

小さな三角形、即ち少女で研究した人間という三角形の智、情、意の角度の關係は、大きな三角形、トルストイ翁にもあてはまらないでしょうか。

酒席で権助が八公を恥かしめた。八公は権助に復讐しようとしたが、その席では勝味がない。同席の者は手を叩いて皆八公を笑つた。そこで八公は隠忍自重、機を見て権助を暗打ちして殺した。一寸の虫にも五分の魂があつたのだ。

織田信長は、或る席で家臣の明智光秀を辱かしめた。そのために、光秀は京都の本能寺で信長を暗殺した。

ナポレオンは自分の威力にまかせて世界中を我儘に振舞つたが、遂にセントヘレナに流されて、悲歎のうちに死んだ。

小さな三角形で研究したことは、いくら大きな三角形にもあてはまるようだ。これが人間の相対世界、五分五分の実状でないでしょうか。

他にも、聞いたのですが、独乙のリストという経済学

殺したり、殺された者はいくらもある。それ等は、或は満足して死んで行つたかも知れぬ。然し、いやしくも人が命を捨てるには、捨てるだけの理想と信念があるでしょう。命を取り替えても惜しくない理想を持つ人は幸福であろうと思う。その人はその理想実現のためには命をかえりみないであろう。

昔、『まことに一人なりとも信をとるべきならば、身を捨てよ、それはすたらぬ』とて、八十五才の一生を尽された人もあつた。」

天親菩薩の御自督

花田正夫

天親菩薩は浄土論の冒頭に、

世尊我一心 世尊よ、我、一心に、

帰命尽十万

無碍光如来

願生安樂國

尽十方無碍光如来に帰命し、安樂國に生れんと願じたてまつる。と述べていられます。

曇鸞大師は、この論を註解せられて、この一句を、「天親菩薩の自督の詞である」と申されました。自督とは人各々の自己の信仰の領解であります。

天親菩薩は、俱舍論、唯識論、仏性論、十地論、法華論、涅槃論、浄土論、等々沢山の書を著され、竜樹菩薩とならんで「千部の論主」と讃えられる方であります。そうであ

りますから、私共といたしましては、論主の衷心が何処にましますかの見分けが出来ないのでありますのに、曇鸞大師の御蔭で、菩薩の御自督を知らされるのであります。即ち菩薩の御安心は「帰命尽十方無碍光如来」の一つにあつたと知らされるのであります。

親鸞聖人は、自督の誓の字について、勸也、率也、正也と加點して、自督とは、自分の心状を吐露して人々に勧め人々の心状を正しくする、というところであると、懇切に説かれています。自信の確立と、教人信の自然の徳光をそこに拝するのであります。

さて曇鸞大師と親鸞聖人によつて指示される、天親菩薩の中心生命とも申すべき、御自督の詞に、先ず耳をそばだてましょう。

「世尊よ、我、一心に」

世尊とは釈尊であります。仏滅後九百年の像法の時代に誕生された菩薩が、まず第一番に「世尊よ」と呼びかけられてゐるのであります。

曇鸞大師はここで、『忠臣、孝子というものは、先ず君主や親父に何事も心中を打ち明けて、その御指示をきき、思召しのままに動靜するように、菩薩が仏陀におつかえ申すのもその通りである、天親菩薩も仏心のまこと一つにしたがわれて全く無私なお心で「世尊よ」と先ず啓白されて

いるのである』と説かれています。

「我」とは、菩薩御自身のことであります。「一心」とは、仏陀の教に帰して、二心のないことであるります。

「釈迦牟尼世尊よ。私は世尊の仰せのまゝを頂いて、二心はありません」

私共は、ここではからずも、歎異抄第二条の、聖人の御自督に想到いたします。

「親鸞におきては、……、よきひとの仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり。……たとい法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄に墮ちたりともさらに後悔すべからず候、云々」

とは、全く天親菩薩の御心そのまゝの表白ではありませんか。天親の親、曇鸞の鸞を項かれて、愚禿親鸞と名告られるお心持をここにも明らかに拝することが出来ます。

次に、

「尽十方無碍光如来に帰命し

安樂国に生れんと願じたてまつる」

とありますが、聖人はここを、「銘文」に、

○「帰命と申すは如来の勅命にしたがいたてまつるなり」
○「尽十方無碍光如来と申すは、すなわち阿弥陀如来なり、この如来は光明なり。」

尽十方というは、尽はつくすという。ことごとくという、十方世界をつくして悉くみちたまえるなり。無碍というは、さわることなしとなり。衆生の煩惱悪業にさえられざるなり。

光如来と申すは、阿弥陀如来なり。云々」

○「願生安樂国というは、天親菩薩、かの無碍光仏の願行を信じて、安樂国に生れんと願いたまえるなり」と、やわらげてお説き下さつています。しかも、聖人の京都にお帰り後、御晩年には、帰命尽十方無碍光如来の十字名号を本尊として朝夕にあがめられました。

「十方無碍」とは、何という廣大無辺の徳光でありましょうか。嘗て頼山陽を大喝して孝心に立ち帰らしめた易行院法海師の歌に

明らけき光を四方の限りにて月のうちなる武蔵野の原
武蔵野のちり／＼草の露だにも身を細めてぞ月は宿れりと、十方を照す無辺光、無碍光の、外に内に満ちみつるのを渴仰され、随喜されたものであります。

私自身、ここに驚喜いたし初めましたのは、「隣人を愛

せよ」の教に難渋し、「下坐行」に挫折して、八方塞がり五里霧中の闇夜に彷徨している時、

「弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず、云々」の一句に、障り多く、罪深い身に、一縷の光明が点ぜられたのであります。それは恰も、殺父の大罪の故に、身心苦悶し、誰一人として我を救う者なし、と大煩悶におちた阿闍世王が、亡父の聲、耆婆の勧めによつて、釈尊の前に立つた時、「大王よ、阿闍世大王よ」と、微塵も罪を責められることなく、重ねて呼びかけ給う仏心の大悲、平等の慈悲に感泣、随喜、踊躍した故事も、全く我こととして感佩いたしました。

「尽十方」とは内に外に私共の煩惱生活者のすみずみまで全理解をして下さる方であります。

「無碍」とは、全理解者の故に、我等の煩惱悪業にさえられず、どこまでも、呆れず、捨てたまわぬ不可思議の大願業力であります。

障りなくすべてを照らすみ光はさわりある身のうえにこそ照れ

と、痼疾、不治の死の病床にあつて、臼杵老師は、無碍の徳を讃仰せられました。

近角常音先生が、兄君常観先生の御言葉としてお書きのこし下さつたものに、

またやりそこない、またやりそこない、
それだからおあきれない、お慈悲でないか。

とあります。「信仰をきいて、立派になり、やりそこないのない身になる」と思う人があるがそうではない、わかたというてはまたやりそこない、わかたというてはまたやりそこない。そのやりそこないのやまぬ者を、それだからお呆れなく、お見捨てのないのが仏の真実大悲である」と仰言いました。

池山先生の還暦かんれきの歳のはじめに

たのまるるただ念仏のわれにありさるべき業はさもありあ
らばあれ

と詠じられて、「六十歳の正月元旦、仏前に合掌した心のままである。耳順じゆんという年なのに、正月早々から、それからそれへと、身に持つ業がチャンと無数にひかえているその一つだつて大変なものばかりだが、身から出た錆で通れようもない。そこにただ念仏があらわれて下さる。これ一つのたのもしさに、さるべき業はさもありあられと信しんずる」……(大意)……と説明して下さいました。

「尽十方無碍光如来」とは「内に八万四千の煩惱を具足し、外に末法濁世に処して、その業縁の催すままに織りな

して行く数限りのない罪業のすべてを全理解して下さい、どこへまでも呆れ給わず、捨てたまわぬ阿弥陀仏」であります。

「願生安樂国」とは、その仏の心光に照護せられて、淨土に生れさせて頂くことであります。

最後に残りました「帰命」とは、「如来の勅命にしたがいたてまつる」ことであります。

「如来の勅命」とは、善導大師が、仏意を汲まれて、手にとるように詳しく、明らかに示されました。

「西岸上に人有りて呼うて曰く、
汝、一心正念にして直ちに來れ

我能く汝を護らん。

総て、水火の難に随することを畏れざれ」

と。悪業煩惱の群賊、惡獸、毒虫にせめ立てられて、貪欲の波浪さかまき、慧眼しんの火焰の渦巻く中に、如来の勅命はひびくのであります。

蓮如上人は、御文ごぶんにやわらげて、

「阿弥陀如来の仰せられけるようは、

未代の凡夫、罪業のわれ等たらんもの、

罪はいかほど深くとも、

我を一心にたのまんものは、必ずすくう」

と、お述べ下さいました。

池山先生は、

「一心正念にして直ちに來れ」

の勅命を

「オネガヒダカラ、スグキテオクレヨ」

と和訓されました。そして更に

「一心正念」が「ただ」。「直來」が「念仏して」であるとも、転釈せられました。

ここに天親菩薩の御自督はそのまま

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せを被りて信するほかに別の子細なきなり」

の親鸞聖人の御自督に割符を合すが如く一致するのであ

師の言十年

(一)

川畑愛義

親鸞聖人の大遠忌に当たつて、このような御縁に遇うことが出来ますことを有難く存じます。聖人がおかくれにな

つて丁度七百年、仏恩の深重なことを皆様と共に喜ぶことが出来て何よりであります。

数日前、ドイツから二人の知人がやつてきてこう申しました。「君がドイツで云つたように、日本の風光や景色は全く素晴らしい。しかし日本の本当の民族・伝統の姿は一体どこに見られるのか。建物や、道路・自動車・家具等すべて洋風化し、衣服や履物は云うまでもなく、人々の表情や顔形まで欧米、とくにアメリカ人の模倣ではないか」と。

なるほど日本人の顔まで人真似だというのは滑稽な話ですが、そう云われてデパートのマネキン人形を見ますと、たしかに白がかったりして、純粋な日本人という感じはありません。これが流行の先端を行くのでしょうかから笑い事ではないと思いました。

そこで、私は二人のドイツ人に次のように返答をしたのです。

「たしかに君達の云うような一面もあることは事実には違いないが、切角遠路わざわざやつて来て、日本の表面ばかり観光したのでは意義が少ない。日本文化の精髓は東洋思想、その中心をなす仏教であるということが出来よう。私から見た仏教観に誤りがなければ、その根本思想は、人間としての自覚から始まつて真理への深求に発展する。釈尊の出家、親鸞の生涯の求道の歩みなどがその姿を物語っている。そしてそれが遂に人間の解脱、即ち成仏の世界へ通

ように申されました。私は例によつて先生が尺八を吹いて下さるのかと思つていたら、そうではなくて、何時もよりもつと静かな口調で申されました。

「君達の中学校入試の合格ということも大事だが、それよりもつと大切なことは、心の眼を開くことです。そうすれば何も恐れるものはない。死ぬることだつて有難いと思うことが出来るよ」と。

私は恩師のこの言葉を不思議に忘れることが出来ませんでした。或時は不良性を帯びた利欲主義者になり、或時にはまた赤色を帯びた唯物思想に走り、そうでない時には救いようもない虚無思想にも陥りました。然し遊びにふけて己を失っている時、或は運動会その他で、皆と夢中になつて騒いでいる時、先生のこの御言葉が何処からともなく流れ雲のように浮かんで参ります。生物にとつて、その終末を告げるその死をも有難く迎えるということが出来るそんなことがあろうはずがないと打ち消しても、また何かの機会にふつとこの警句が浮かんで来るのです。

死とは何か、生とは何か、人生の真の目標は何処に求められるか、中学時代の浪漫性や、空想性が、不真面目な私の性格に入り混つて、解決を見ないまま終つてしまひそうです。

ずる道となる。これがムーザー教授も指摘したように、多くの奇蹟の上に教義をおく神の宗教と著しく異なる所以である」と。

二人のドイツ人は改めて三十三間堂の仏像、その他を参観し、それから大遠忌の本願寺にもお参りをして、日本における仏教の高い文化性と大きな影響力に感嘆したようでした。

生来剛慢な私にとつても、人間親鸞の謙虚な求道精神が導きの力となつて、いつも離れそうになりながら、ついに念仏の世界から遠ざかることが出来なかつたように思われます。

「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじところにてありけり」

私と共に土下座されて生涯道を求められた聖人の御心に導かれながら、私も此処へ参つたような気がします。

私は薩南の門徒の家に生まれましたが、生れつき反宗教精神が強かつたらしく、幼い時分から法話が嫌いで、念仏を老人達の慰みごとのように思い、時には死を連想させる縁起の悪いもののように考えました。

その私にとつて、ある小さな出来ごとが起りました。小学校の或日の放課後、中学受験組の者が五、六人で勉強しており、担任の上原先生は、皆に教室の窓を閉める

私は恩師の言葉に大きな疑問符をかけながら、やがて高等学校の門をくぐりました。「疾風怒濤時代」といわれる青年期後半の思想の混乱や、反抗精神の渦中の中においても、小学校の教室で物静かにささやかれた啓示の夢は消えませんでした。あれからもう四年乃至、五年の歳月が流れようとしています。ただこの時代においては、何故か死を克服しようとする意欲と、永遠に変わらぬ真理への探究とが一つの次元の中でからみ合っているようでした。

人間に生れた所詮として、人生に於ける究極の真実に触れてみたい。ある時は愛欲に痴れ、そうでないときは名利に走りましたが、そうした中から純粹を導ぶ青年心理にも駆られて、先輩の門を夜遅く叩いたり、思想の本に頼みかけたたりしたのもこの頃であつたようです。

すべては流転し、一切は移り変つても、何処かに不滅の真理の星がまたたいているような気がしてなりませんでした。実際、その頃格別世間的な不幸や悲しみを知らなかつた私の悩みやあこがれは、真剣味に乏しく、かつ具体性に欠けていたのは事実ですが、本人としては案外真面目なような気持ちでいたようです。卒業アルバムの片隅に「真理を求めて」と記してあります。こうして高等学校三年の間にも、ついに恩師によつて暗示された世界の影さえ窺うことが出来るに、大きな疑問符を背負つたまま大学の門に入

りました。あの日から数えて七年の歳月が流れようとしています。

この頃になつて、真理を追究したいという熱意の裏にはおぼろげながら次のようなことを考えていたやうでした。「人皆が信ずる科学的真理は、実証すべき根拠をもち、最も確かなようなものであるが、これには同時に、それに對する反証の可能性があげられ、決して絶対性を保有することが出来ない。例えば、物理学の金科玉条とされるニュートンの力学、マックスウェルの電磁子学のような画期的大発見でさえも、アインシュタインの相対性原理や量子学説によつて幾分の修正を余儀なくされた。

それから、今後自分が生涯をかけて学ぼうとする医学の領域においても、ほぼ同様のことが云われる。可能の限り迷信や、いんちきの医療行為を排斥しようとしているが、従来の定説や原理がつぎつぎに改訂や修正をうける運命にある現代医学も未だ決して完全ではない。」

これらについては、現在においても私は全く同じような心境であります。例えば、国民死亡の三大原因といわれる脳卒中、癌、心臓病に對して、これを適確に治療する方法は未だ見つかつておりません。それどころか、これらの診断の方法さえ充分でない場合があります。

私の不純な世俗との妥協性^{だきようせい}が、結構私をその日の忙しい生活行動にかりたてていました。ところが、間もなく私共の寮に異様な闖入者とおぼしき者が現われました。彼は當時京大文学部の一学生にすぎませんでしたが、高らかに念仏を唱え、宗教的歡喜に満ちているという風でした。そして、私に向かつて、先ず生死の解決を迫りました。そして、念仏は、生の究明であると共に、死の救済である。「念仏者は無碍の一道なり」と宣言するのです。

かつて小学校の教室で、喜んで死ぬる世界を求めよとささやかれた恩師の言葉以来、実に九年間、このような宗教的感動を受けたことは一度もありませんでした。

私達は間もなく、彼花田正夫氏によつて、当時有名だった横田先生や、池山先生などにも導かれる御縁に会うことが出来ました。

そしてこの頃になりますと、私の求道にも幾分の真剣味^{まけんみ}が加わり、信仰に目覚めるためには「僕が」「俺が」と握りしめるその我を折らなければならぬ。頑迷^{がんめい}なこの我執を砕くためには二つの道しかない。その一つは無常観、その一つは罪惡観に徹することであると知らされました。無謀というか、狂気の沙汰ともいふべきか、私は無常観に徹しようと、医学研究用の人間の骸骨^{がいこつ}を机の上に置いて考え込んだり、宗教書を繙^もいたりしたことがありました。

比較的最近、しかも私の最も身近かに起こつた例として私の弟は、生前八人位の大学の専門の教授の診断を受け、考えられる最高の治療と手当てを受けました。しかし死後解剖してみると、意外にも、それらは全き誤診で、望ましくない治療ばかりを受けていたことがわかりました。

だからと云つて、私は現代の医学を否定しようとするものではなく、ます／＼これを向上させなければならぬことは勿論であります。ここにも人智の限界と制約のあることを認めなければなりません。

大学の医学部に学生として入りました時、私はすでに生命の絶対的救済は宗教以外にはないのではないかと思うやうになりました。というのは、彼において発見された真理は、すでにその反証の可能性を約束しており、私の純粹理性あるいは叡智なるものによつて認識されたとしても、その真実はすでに相対的であり、有限の制約を免れることが出来ない。

私は何としても宗教の真実を追究しなければならぬとあせるやうになりました。その頃無二の親友はキリスト教に走りましたが、私はやがて京大の仏教学の羽溪教授の寮にお世話になることになりました。しかし、此処に入りまして、決して真剣に求道したわけではありません。

(三)

しかしあせればあせるほど、行く手に疑問の壁は厚く、悩めば悩むほど、脚下の暗黒は深くなるばかりでした。

私は、いつそのこと、世間の多くの人のやうに、まともな信仰のことなど考えずに、頽廢^{たいはい}的な遊びに耽ろうとしたのも事実です。然し、大願の業力^{ごうりき}ともいうものでしょうか目に見えず、音にも聞かれない世界に引かれて行くのです。私はある夜遅く、例の如く骸骨を置いた机の前に座つて静かに歎異抄を読んでおりました。すると第二章のところに読みかかった時に、本当に聖人のお声を、じかに耳もとに聞くやうに思つたのです。

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり」

と。ああ、そうであつたか、そうだったな。私も、と思つたその瞬間、私はあだかも、八万四千の光明に包まれたかやうでありました。

あれほど苦行、難行を積み、思惟に思惟を重ねられ、ひたすら真実を求められた聖人が「ただ念仏して……」と仰せになつたのです。ましてや物の数ならぬ私、一時の行もしたことのない私ごときが、……と、ひれ伏した時、さしもかたくなな我執も空ぜられたのでありましようか、あれ程称え難かつた御念仏が、止めどもなく口から溢れてい

ました。

聖人は、さらに、念仏が真に浄土に生まれる種になるのか、それとも地獄におちる業となるのか、根つから解らない。たとえ法然上人にだまされても後悔は更にないと、端的に入信の極致を表明されています。

私はこのような大胆な獲信の告白を聞いたことがありません。そればかりか、更にすすんで、私のような頑固もののために、次のような駄目押しをされています。

他の行を励んで仏になるべき身が、念仏して地獄に落ちればこそ、だまされたという後悔も起る可能性もあろうに、いずれの行もかなわぬ身であつてみれば、もともと地獄行が決定的なんだから……。

今まで何回聞き、何十回読んだか知れない御言葉聞き逃し、見逃がして来た私でした。

(四)

「本願力にあひぬれば、

むなしくすぐる人ぞなき」

そこには自力も他力もなく、自他を云々する生命自体が絶対他力の本願の中に、さながらに救済されているばかりでした。

私は、そこで家に帰つて、先ず弟に向かつて云いました

「今まで君は、この兄の言うことに何一つ背いたことはなかつた。しかしこの一言を聞かなかつたら、何一つ聞いたことにならない。これは人生の総てであるからである」と。弟は真剣に求めてくれました。そしてやがて御念仏を唱える御縁に会うことが出来ました。

次に私は妹を呼びました。

「今生、夢のうちの縁をもととして、永遠の兄妹になりたい。どうか仏の道を聞いてくれよ」

と。やがて妹も聞法の人となりました。そして地上に生を受けた三人兄妹が揃つて御仏の前に合掌する日が続きました。

最後に私は母に申し上げました

「今まで私は母上から仏様のお話を聞いていましたが、念仏一つ唱えることが出来ませんでした。今やつと御信心の有難さがわかるような気が致します。一緒にお寺さまにお参りしましょう」

という時、母は私の変わりように驚きながらも、喜んで参詣し、一層念仏の有難さを讃嘆するようになりました。

私が小学校の上原先生からお話を聞いてから丁度十年になります。私は初めて先生が語られた啓示の星はこれだと確信しました。

残念ながらその時、先生はすでに他界されておりました

が、先生の御言葉の世界はこれ以外にはあり得ないと体感致しました。

それから数年後、私は薩南の一漁村にある、上原覚市先生のお墓に参りました。すでに古びた墓標には青白い苔がむしていました。私は墓前で、先生の一言に導かれて十年ついにここまでやつて参りましたと、心の中で先生に告げると、つい涙がこみ上げてまいりました。

墓参の帰り途に未亡人から、子孫にまで伝えよ、という先生の手記の一冊が残されていることを知りました。私はそれを拝見させて頂いているうち、それがまぎれもなく、私共に話して下さつたあの世界のことであることがわかりました。それが念仏の御信仰であつたことはいちもありません。

仏智不思議とはよく申されますが、何一つ証明の方法もなく、何一つ実験の道具もないのに、御六字の世界においては、如来によつて検証される真実だけが、厳然として存在しています。

しかし念仏を唱えながらも、我身の罪業の深さは一向に減退しそにありません。悲しむべき人の子の迷妄の根強さは、ここに懺悔する力もない位であります。

私の弟も、自分では今度は多分駄目であろうと自覚する

ようになって、病気の苦痛や、残して行かなければならぬ妻子のことなどに随分悩みましたようです。そして、その苦悩の一端を、北陸の田舎に静居している信友のH君に書き送つたりしております。そしてその返事をこまなき病床の甘露とも喜んでいたようです。

H君の便りの文は、訥々としておりますが、信味が行間に滲んでいるようです。一部を読ませて頂きます。

「今あなたが御病気で苦しんでいらつしやること。お子さんのことで辛い思いをしておいでになること、さぞ大変であろうと察します。これも同病相憐むと申しましたようか、私にも同じような悩みを持つております。しかしどうにもなりません。ただここに、ただ念仏せよ、という教えがありますから、それだけを力として参りますナムアマダブツを唱えるのみです。念仏をしたからと言って何の利益もないという人がおります。私もそうだと思います。すべの苦しみを越えさせて頂くという利益が、事実となつて現われて来ます。」

かつての日、私はお兄さんに教えられて念仏する身となりながら、念仏申し候えども、どうしても困る／＼と思つておりました。今でも始終困つておるのですけれどもただ念仏せよ、という御教えに光を仰いでまいります

ことです。」

弟はこの便りを読んで、誰の手紙よりも有難いと喜び、みずから慰めていたようであります。

(五)

弟は、死の一週間ぐらい前には、もうこれが最後の手紙であろうなどと私の方に書いてよこしました。二、三日前になつて遺言の修正や、身辺の始末などをさせました。死の当日、死期が迫るに従つて、意識は極めて明瞭なのに殆んど何らの苦しみも訴えず安らかに死を迎える心の用意が整えられたようであります。

私は不幸にして臨終に間に合いませんでしたが、約三十分ぐらい前に、もう間近だから、時計を見ていよと言ひそれから時が経つて、自分の左手の脈を右手ではかつていたが「今が臨終だよ」と言つて、平静に最後の息を引きとつたそうです。

前に申し上げたように、私の母が彼の信仰について氣遣つたときに「他のすべては間違つていても、お慈悲だけは大丈夫です。亡くなつた姉と共に、仏様の所で会いましょう」と母に言つたそうであります。

このように申ししましても、人間としての愛欲や迷執には極まりがないもので、大いなる撰取の光明の中にありなが

ら、弟は何や彼やと浮世の煩悩に悲しみ続けたようです。

死も間近かなある日、

「若し僕が死んで墓を建ててくれるならば『ここに悔多き男眠れる』と書いてくれ」と言つたそうです。

省みますと私は、三人兄姉の長兄として生まれながら、先に一人の妹を失ひ、今またこのように悲しい弟の死を見送らなければならない宿業の身として、感慨に堪えないものがあります。母も幾度か、私で替わつてあげられるものならばと歎いておりました。

このように、殆んど救いようのない肉親の別離の悲しみの中にあつて、ただ一つの救済は、純粹な信仰の力でなければなりません。妹が亡くなるときには、肉親としてただ一人私が側に付き添つておりましたが、長い病気の末でもありましたので、妹のからだは極度の衰弱に陥つておりました。しかしお慈悲を迎えられる彼女の心はおだやかで、殆んど聞えないような称名を續けているようでありましたところが、死期が迫つて息が苦しくなると、手を動かして何か虚空をつかむよう恰好をいたします。それからいつて別段何かを悩んだり、恐れたりするような氣配は少しも見えませんが、すると突然妹が、

しむか、すべてはおはからいにまかせるより仕方がありません。

私如きものが、このような尊い法座、に連なることは、御法を汚すことではないかと恐れも致しますが、あのよう

に罪深い男でも救済されるのであるからと、御慈悲の無尽を考へ下さいまして、どうかお許しいただきたいものと存じます。

はらかなの死に憶ふ

野をゆけば 家に帰れば おもかげの まぶたに見ゆる
いとけなき日よ
いかばかり 辛くありけむ 若妻に 悩みもつちら 後
を托して

明日といふ 日のあるものを ひとたびの 声きかせて
よ風のなかより
ほとほとに 消ぬべき人だも 永らえて わが弟は
死にはてにけり

善(つつが)なく、今日も暮れゆく夕映の比喩(ひえ)の山
に、うつらうみれば
東山 大谷廟の ほとりなり おくつきどころ 定めけ
るかも

はらかなの えにしよろこばむ み仏の 悲願のなかに
生きにけるかも

昭和三十六年、六月廿四日

愛 義

あとがき

六月二日の福島先生の御講話会には五十人近い方が方丈の小庵にお参集下され、特に「親と子」という題で、親子の問題の底をついての御法味を存分に頂きました。その節思いもかけず京都の榊原御夫妻の御来会をうけ、嬉しい限りであつた。又最近、親御とお別れになりました小谷善一様や、植田、片野の両姉には、深く身に泌みてお聞き下された由、承ります。更に九州中津市の今永先生の御老母様が先生と御来聴、要所々々に、大きくうなづかれての称名、合掌、一入引き立てて下さいました。

翌六月三日、加州セルマの梅田又一さんが突然御入来。前夜より御滞在の榊原様などと共に、法味談合、一刻千金の思いがいたしました。「信教の自由を第一条件として独立し開拓した米国だから、キリスト教国にあつて、仏教徒の我々が開法することの自由をよく認めてくれるし、むしろ一番きらうのは、無信仰の者であります。」の一句は省みさせられるものであります。又、梅田さん個人は「一五五年前、十八才で渡米した時、母がくれぐれも再会は出来なないが、お念仏を忘れるなと云つてくれたこと、その御恩をいよく仰いでおります」との御述懐、御老母ながら益々健強、身をもつて報恩の大作をはたして下さる方と心にあがめつつ、つきぬ名残を惜しみました。

四月の本願寺の御遠忌中に、高倉会館でお話し下さつた川畑愛義様の講話原稿を早速本号に載せさせて頂きました。御妹様も、今度亡くなられました愛浩様も「一體山上同聴の友」でありまして、今回の御別れはまことに心いたむものがあります。御兄さんの御口から最後の模様を聞かして頂き、この記事をもつて、愛浩さんのよき記念碑の一つとさせて頂きます。

明日の夜は照りますものと知りながら入るさの月の措しくもある哉

のべ

教行信証

森西州著

著者略歴、明治二十四年生れ、八高、東大宗教学卒業、佐賀高校教授。現在、滋賀県志賀町小松徳善寺住職。定価、壹千円也徳善寺にお申込下さい。

信仰体験録

著者故・安波勲八著

定価二五〇円、送料六十円。各地の要望にこたえ、再版されました。安波医師のありのまゝの求道物語で、ことに死の宣告をうけてからの所感に宝玉の文であります、又随想録も、医師としてのお生活の中から法味の湧出をされるものであります。

「仏の慈悲を有難く思える様になつた事がある難いのではない。有難く思えぬ奴を相交らずお相手下さることが有難い事で

ある。聞名院釈正信書」はその絶筆であり、仏の大悲の底を告げられる金句であります。出版所、京都左京区高野泉四〇香華書館。

自照のこころ

佐々木徹心著

定価二五〇円、発行所、京都下京区堀川通花屋町百華苑

著者紹介。明治四十一年佐世保に生る。電大研究科、宗学院卒業。京都女子大学教授。住所、京都市左京区下鴨、東高木町二三ノ四、

御案内

七月第二日曜、歎異抄第十五条。第三日曜、正信偈竜樹章。一道会。廿四日、昭和区小桜町教西寺、法話会。

定価一部 二十五円（送共）

半年 百五十円（送共）

一年 三百円（送共）

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 本田 政雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番